

## 博士課程修了生体験談（人文学プログラム）

鈴木 大輔（2025 年度修了）

私の研究テーマはノストラダムスです。

私は修士課程から放送大学に入りましたが、修士課程の志望時点では、研究テーマを胡散臭く見られて門前払いされないかと不安でした。しかし、それは全くの杞憂で、入試の面接が建設的な質疑だったことは勿論、入学後も、主指導教員の野崎敏先生は私のやりたい方向を尊重して下さりつつ、学術研究として足りない点を多々ご指導下さいました。そのお蔭で研究を深められた反面、修論では研究テーマの導入的内容で終わりそうだったため、引き続き野崎先生の下で研究したいと考え、博士課程への進学を決めました。

博士課程が狭き門なのは認識していましたが、数年浪人することを覚悟の上で、受かるまでに査読付き論文を書き進めようと考えていました。有難いことに一度で合格出来ましたが、それは同時に、特論科目や研究法科目を修めながら、学会発表や論文投稿の準備をしないといけなくなったことを意味していました。

博士課程修了には研究法 3 単位が必要ですが、私が師事した先生方の研究法科目は全て 2 学期の開講でしたので、1 年次 2 学期に 2 科目、2 年次 2 学期に 1 科目を取りました。私の場合、他の受講者がおらず、特論科目も研究法科目も実質的に個別指導の形になり、贅沢な体験をできました。その反面、1 対 1 の質疑の中で自分の不勉強さが容赦なく露見する場にもなりえたため、毎回の授業だけでなく、その準備にも、ある種の緊張感があったことを覚えています。それと並行し、紀要（『放送大学文化科学研究』）の論文、学会発表の準備、査読付き論文の投稿と査読対応の修正をこなすのは、精神的・時間的に本当に大変でした。

所属する学会の学会誌が刊行される日程により、3 年次の春までに査読付き論文 2 本が揃わない（＝予備論文の提出条件を満たせない）可能性が高いことは入学時に分かっていたので、私は 4 年間での修了を目指し、単位取得や論文投稿の予定を立てました。

以前、私は他の大学院で経済史を専攻しましたが、自分の取り組み方に問題が多々あり、博士号を取得できませんでした。そこで今回はその反省を踏まえ、目先の忙しさに流されず、予定を崩さないように（たとえ粗くとも）論文を書いて、先生のご指導によって彫琢していこうと決意しました。その結果、予定していたテーマでの査読付き論文 2 本だけでなく、予定外のテーマでも 1 本書くことができました。紀要論文 3 本も含め、予定以上の業績を上げられたのは、ひとえに野崎先生の御指導と励ましのお蔭だったと思っています。

私の博士論文の構想はやや大風呂敷をあげ過ぎた感がありましたが、仏文学の野崎先生に加え、西洋史の河原温先生と、戦後日本社会論にも造詣の深い原武史先生に副指導教員をお引き頂いたことで、どうにか纏めることができました。私は過去に、自分の狭い専攻分野に直結する科目だけで所定単位を取りきれぬ国立大の博士課程も、少し領域を広げて単位を取る必要がある公立大の修士課程も経験したため、大学院の規模ごとに違った良さ

があることは認識しているつもりです。ただ、今回の私のように風呂敷を広げた構成にする場合、研究テーマの現代的意義や社会的意義をより広い文脈の中で問い続けつつ、研究を深めていく場として、放送大学大学院は適していたように感じています。

以上が私の拙い体験になりますが、いづらかでもご参考になる点があれば幸いです。